

## 幼稚園における野菜栽培活動の状況とその食育効果

## －北海道某市での調査－

Status of vegetable growing activity in kindergartens and effects of  
nutrition education : A survey in a city in Hokkaido

木 田 春 代<sup>1) 2)</sup>

Haruyo KIDA

武 田 文<sup>2)</sup>

Fumi TAKEDA

荒 川 義 人<sup>1)</sup>

Yoshihito ARAKAWA

大 久 保 岩 男<sup>1)</sup>

Iwao OHKUBO

本研究では、北海道某市内全幼稚園を対象に野菜栽培活動に関する質問紙調査を行った。2011 年度に野菜栽培を行った 74 幼稚園のうち 85%の幼稚園は、栽培場所が園内、栽培物がトマトであり、全ての幼稚園で園児が収穫など何らか野菜栽培活動を行っていた。また、85%以上の幼稚園で野菜栽培活動で育てた野菜を好きな子どもや食べ物に興味・関心を示す子どもが増加していた。加えて、活動頻度が週 1 回以上の幼稚園は、週 1 回未満の幼稚園よりも食べ物に興味・関心を示す子どもや嫌いなものでも頑張っ食べる子どもが増加した割合などが高いこと、保護者が野菜栽培に参加した場合はしなかった場合よりも食事の準備や後片付けに積極的な子どもが増加した割合が高いことが示された。これらのことから、幼稚園における野菜栽培活動は有効な食育である可能性、また、週 1 回以上の活動、保護者の参加により食育効果が高まる可能性が示唆された。

In this study, a questionnaire survey was conducted on the status of vegetable growing activities and the effects of nutrition education in all kindergartens in a city in Hokkaido. Of the 74 kindergartens in our sample that performed vegetable growing activities in FY 2011, 85% grew vegetables on site, 85% grew tomatoes, and 100% engaged their kindergarteners in some gardening activities (e. g., harvesting). In more than 85% of the kindergartens, the number of “children who like the vegetable they grew” and “children showing interest and attention toward food” increased. Furthermore, it was shown that compared to the kindergartens engaging children in gardening activities less than once a week, the kindergartens that held gardening activities at least once a week had a higher rate of children who began exhibiting interest in food and children who attempted to eat foods that they did not like. Also, it was revealed that compared to the

1) 天使大学看護栄養学部

(2013 年 1 月 8 日受稿、2013 年 3 月 22 日審査終了受理)

2) 筑波大学大学院人間総合科学研究科ヒューマン・ケア科学専攻

kindergartens without parent participation in gardening activities, the kindergartens with parent participation had a higher rate of children who helped in meal preparation and cleaning up after meals. Considering these results, we suggest that vegetable growing activities in kindergartens may be effective for the nutrition education of children, their effectiveness may increase when vegetable growing activities are conducted at least once a week and involve parental participation.

キーワード：幼稚園 (kindergarten)

幼児 (infant)

野菜栽培活動 (vegetable growing activity)

食育 (nutrition education)

## I. 諸言

食育基本法<sup>1)</sup>では、様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し健全な食生活を実践することができる人間を育てることが求められている。また、幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う上で重要<sup>2)</sup>とされ、幼稚園教育要領<sup>3)</sup>ならびに保育所保育指針<sup>4)</sup>には、「食育の推進」が盛り込まれている。

幼稚園教育要領解説<sup>5)</sup>では、自ら進んで食べようとする気持ちを育てる上で食べ物に対する興味や関心を高めることが重要であるとして、野菜栽培を媒体とした食育活動が示されている。幼稚園における野菜栽培活動は、園児が職員とともに土づくり、種まき・苗植え、収穫などを行う一連の活動であり、幼稚園教諭に五感を使って楽しくできる食育活動として認識されている<sup>6)</sup>。

幼稚園における野菜栽培活動に関する先行研究は、これまで、野菜の栽培から調理までを体験した園児の給食摂取量が体験前と比較して増加したこと<sup>7)</sup>や野菜嫌いの割合が低下したこと<sup>7, 8)</sup>、また海外において多職種巻き込み型菜園活動を体験した園児の野菜に対する嗜好が好転し野菜を食べたいという意志が増加したこと<sup>9, 10)</sup>など、野菜栽培を媒体とした食育プログラムの効果がいくつか報告されている。しかしながら、幼稚園における野菜栽培活動が一般的にどのように行われているのか、また、野菜栽培活動が園児の食に対する態度や行動にどのような変化をもたらすのかについての報告は見当たらない。

そこで本研究では、北海道某市内幼稚園における野菜栽培活動の実態および野菜栽培前後における園児の食に対する態度や行動の変化について明らかにするとともに、園児の食に対する態度や行動の変化と活動内容との関連について明らかにすることを目的とした。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象および調査方法

2012年3月に北海道某市内の全幼稚園（公立幼稚園：13園、私立幼稚園：133園）を対象に、調査票を郵送した。調査票の表紙に、本調査の目的、個人情報保護、回答は自由意思であり拒否や中断が可能であること、調査票の提出をもって調査協力への同意とみなすことについて明記した。回答者については指定しなかった。返信用封筒を同封し、調査票記入後に返送してもらった。

### 2. 調査項目

調査項目は、単数回答で「園児数」「栄養士配置の有無」「給食実施状況」「食育年間計画書の有無」「2011年度の野菜栽培の有無」「野菜栽培活動前後における園児の食に対する態度や行動の変化」、複数回答で「栽培場所」「栽培物」「野菜栽培担当者」「園児の活動内容」「収穫物の利用方法」「保護者への野菜栽培活動状況の報告方法」「保護者の野菜栽培活動への参加内容」を設定し、あてはまる選択肢に丸印を付けてもらった。また、「園児の活動頻度」については、活動頻度が決まっている場合は週1回10分などの数字を直接記入、それ以外は「特に決まっていない、その他」とした。また、各項目および、調査票の最後に野菜栽培や菜園活動の感想、独自の取り組みについての自由記述欄を設けた。

「野菜栽培活動前後における園児の食に対する態度や行動の変化」に関する質問は、先行研究<sup>8, 11)</sup>を参考に「育てた野菜を好きな子どもが増えた」など7項目を設定し、選択肢は「よくあてはまる」「まああてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」とした。

### 3. 分析方法

回収した80部（回収率54.8%）のうち、「2011年度の野菜栽培の有無」に「あり」と回答し、か

つ野菜栽培活動に関する質問への回答があった74園（有効回答率50.7%）を分析対象とし、各項目について単純集計を行った。なお、「園児の活動頻度」の回答については「週4-5回」「週1-3回」「週1回未満」「決まっていない」と分類した。

次に、園児の食に対する態度や行動の変化と活動内容との関連について分析した。その際、「園児の活動頻度」は、「週1回以上」群（週4-5回・週1-3回）と「週1回未満」群（週1回未満・決まっていない）、「料理教室（園児のみ）」は「あり」群と「なし」群、「保護者の参加」は「保護者の野菜栽培活動への参加内容」にあてはまる選択肢が1つ以上ある場合を「あり」群、ない場合を「なし」群とし、「野菜栽培活動前後における園児の食に対する態度や行動の変化」の回答を「よくあてはまる・まああてはまる」と「あまりあてはまらない・まったくあてはまらない」にそれぞれ2群化して、 $\chi^2$ 検定を行った。統計解析には SPSS Statistics 20.0 J for Windows を用い、統計的有意水準は5%未満とした。

### Ⅲ. 研究結果

#### 1. 本対象幼稚園の特徴

本対象幼稚園の園児数は、99人以下が23園（31.1%）、100-199人が16園（21.6%）、200-299人が23園（31.1%）、300-399人が9園（12.2%）、400人以上が2園（4.1%）であり、給食の実施状況は「委託給食」が44園（59.5%）、「園内調理」が11園（14.9%）、「なし」が19園（25.7%）であった（表1）。

#### 2. 野菜栽培活動の状況および野菜栽培活動への保護者の関わり方

「栽培場所」は「園庭」が27園（36.5%）、「近くの畑・その他」が12園（16.2%）、「プランター」が4園（5.4%）であり、この他の約4割の幼稚園はこれらの場所を組み合わせる野菜栽培を行っていた。「栽培物」は「トマト」が64園（86.5%）、「野

菜栽培担当者」は「担任教諭」が59園（79.7%）とそれぞれ最も多かった。「園児の活動内容」は「収穫」が73園（98.6%）、「種まき・苗植え」が70園（94.6%）、「水やり」が62園（83.8%）、「園児の活動頻度」は「週4-5回」が21園（28.3%）、「決まっていない」が27園（36.5%）であった。また、「収穫物の利用方法」は「おやつ」が43園（58.1%）、「持ち帰り」が34園（45.9%）であった（表2）。「保護者への野菜栽培活動状況の報告方法」については、「園/クラス便り」が50園（67.7%）と最も多く、「保護者の野菜栽培活動への参加内容」は「種まき・収穫」が13園（17.6%）、「収穫祭などの行事」が12園（16.2%）であった（表3）。

表1 対象幼稚園の特徴 園数 (%)

	全体 (n=74)
園児数	
99人以下	23 (31.1)
100-199人	16 (21.6)
200-299人	23 (31.1)
300-399人	9 (12.2)
400人以上	3 (4.1)
栄養士配置	
あり	13 (17.6)
なし	61 (82.4)
給食実施状況	
あり(委託給食)	44 (59.5)
あり(園内調理)	11 (14.9)
なし	19 (25.7)
食育年間計画書	
あり	23 (31.1)
なし	43 (58.1)
来年度から作成予定	4 (5.4)
不明	4 (5.4)

表2 野菜栽培活動の状況	園数(%)	
	全体 (n=74)	
<b>栽培場所</b>		
園庭	27	(36.5)
近くの畑・その他(姉妹校の畑、農家と契約など)	12	(16.2)
プランター	4	(5.4)
園庭+プランター	16	(21.6)
園庭+近くの畑・その他	6	(8.1)
園庭+プランター+近くの畑・その他	6	(8.1)
プランター+近くの畑・その他	3	(4.1)
<b>栽培物</b>		
トマト	64	(86.5)
ピーマン	37	(50.0)
なす	30	(40.5)
その他(じゃがいも、枝豆など)	66	(89.2)
<b>野菜栽培担当者</b>		
担任教諭	59	(79.7)
担任以外の教諭	22	(29.7)
外部講師	5	(6.8)
栄養士	1	(1.4)
その他(バス運転手など)	16	(21.6)
<b>園児の活動内容</b>		
収穫	73	(98.6)
種まき・苗植え	70	(94.6)
水やり	62	(83.8)
観察日記つけ	21	(28.4)
その他(草むしり、土づくり、後片付けなど)	22	(29.7)
特に関わっていない	0	(0.0)
<b>活動頻度<sup>a)</sup></b>		
週4-5回	21	(28.3)
週1-3回	17	(23.0)
週1回未満	9	(12.2)
決まっていない	27	(36.5)
<b>収穫物の利用方法</b>		
おやつ	43	(58.1)
持ち帰り	34	(45.9)
収穫祭などの行事	28	(37.8)
料理教室(園児のみ)	24	(32.4)
給食食材	13	(17.6)
料理教室(親子)	2	(2.7)
その他(弁当時の味噌汁、お泊り会の食材など)	12	(16.2)

a) : 単数回答      a)以外 : 複数回答

表 3 野菜栽培活動への保護者の関わり方	園数 (%)
	全体 (n=74)
保護者への野菜栽培活動状況の報告方法	
園/クラス便り	50 (67.6)
送迎時の対話	21 (28.4)
給食/健康便り	15 (20.3)
連絡帳	9 (12.2)
ポスター等を掲示	8 (10.8)
その他 (ブログ、HPなど)	11 (14.9)
知らせていない	2 (2.7)
保護者の野菜栽培活動への参加内容	
種まき・収穫	13 (17.6)
収穫祭などの行事	12 (16.2)
栽培途中の手伝い	7 (9.5)
その他 (試食など)	6 (8.1)
関わっていない	50 (67.6)
複数回答	

### 3. 野菜栽培活動前後における園児の食に対する態度や行動の変化と活動内容との関連

「野菜栽培活動前後における園児の食に対する態度や行動の変化」について「よくあてはまる・まああてはまる」の回答割合が高い項目は「育てた野菜を好きな子どもが増えた」が68園(91.9%)、「食べ物に興味・関心を示す子どもが増えた」が65園(87.8%)であった(表4)。

また、園児の食に対する態度や行動の変化と野菜栽培活動の内容との関連を見たところ、活動頻度が「週1回以上」群は「週1回未満」群よりも「食べ物に興味・関心を示す子どもが増えた」「嫌いなものでも頑張って食べる子どもが増えた」「食べ物を大切にする子どもが増えた」「食べることに積極的な子どもが増えた」「好き嫌いをなく食べられる子どもが増えた」「食事の準備や後片付けなどお手伝いに積極的な子どもが増えた」割合が有意に高かった。また、保護者の参加が「あり」群は「なし」群よりも「食事の準備や後片付けなどお手伝

いに積極的な子どもが増えた」割合が有意に高かった。一方、料理教室実施の有無との有意な関連は見られなかった(表4)。

## IV. 考察

### 1. 本調査対象幼稚園における野菜栽培活動の状況

本調査対象幼稚園において、園庭またはプランターを使用して野菜栽培を行っている幼稚園は約85%であった。園内で野菜栽培が行われている場合は、自由活動の時間や登下校時など、園児が自由に野菜を観察可能であり、本調査対象幼稚園の多くがこうした環境にあるといえる。また、自由記述から園庭とプランターの両方を使用している場合には、年少組はプランターでミニトマトやラディッシュを栽培し、年中・年長組は畑でジャガイモを栽培するといった使い分けをしている幼稚園があることがわかった。園庭とプランターを併用する利点として、野菜の区分けがしやすいことや



表4 野菜栽培活動前後における園児の食に対する態度や行動の変化と活動内容との関連

	全体 (n=74)		園児の活動頻度		料理教室 (園児のみ)		保護者の参加		P値
	週1回以上 (n=38)	週1回未満 (n=36)	あり (n=24)	なし (n=50)	あり (n=22)	なし (n=52)			
育てた野菜を好きな子どもが増えた	36 (94.7)	32 (88.9)	24 (100.0)	44 (88.0)	22 (100.0)	46 (88.5)	0.168	0.170	
食べ物に興味・関心を示す子どもが増えた	37 (97.4)	28 (77.8)	22 (91.7)	43 (86.0)	20 (90.9)	45 (86.5)	0.709	0.716	
嫌いなものでも頑張って食べる子どもが増えた	36 (94.7)	25 (69.4)	21 (87.5)	40 (80.0)	20 (90.9)	41 (78.8)	0.528	0.321	
食べ物を大切にすることを子どもが増えた	36 (94.7)	25 (69.4)	21 (87.5)	40 (80.0)	20 (90.9)	41 (78.8)	0.528	0.321	
食べることに積極的な子どもが増えた	34 (89.5)	23 (63.9)	20 (83.3)	37 (74.0)	19 (86.4)	38 (73.1)	0.556	0.364	
好き嫌いをなく食べられる子どもが増えた	33 (86.8)	22 (61.1)	20 (83.3)	35 (70.0)	19 (86.4)	36 (69.2)	0.266	0.154	
食事の準備や後片付けなどお手伝いに積極的な子どもが増えた	31 (81.6)	19 (52.8)	19 (79.2)	31 (62.0)	19 (86.4)	31 (59.6)	0.188	0.031 *	

$\chi^2$ 検定 \* P<0.05 \*\* P<0.01  
数字は「よくあてはまる・まああてはまる」と回答した園児 (%)

栽培場所を有効活用できることなどがあげられ、年齢に合わせて品種を選択し場所を使い分けていることが推察された。一方、近くの畑を借りたり、姉妹校と共同で畑を所有している幼稚園や農家と契約を結んで野菜栽培活動を行っている幼稚園も約4割見られた。これらの幼稚園の自由記述によると、スペース的な理由から年長組のみが外部の畑を借りて野菜を栽培していることや、リンゴの花見から収穫まで年間を通じて契約農家を訪れていることなどがあげられており、活動の仕方は幼稚園によって様々であった。幼稚園以外の場所で野菜栽培をしている幼稚園の自由記述には、散歩の途中で観察することが楽しみの一つとなることがあげられている。また、農家と契約している場合は幼稚園では育てることが難しい野菜や果物に触れられる機会や農家の人たちとの交流の機会も得られよう。幼稚園の立地条件などにより野菜の栽培場所は異なると考えられるが、それぞれの利点を生かした活動が行われているものと推察された。

本調査において、全体の約85%の幼稚園がトマトを栽培していた。トマトは比較的育てやすいこと<sup>12)</sup>や地上に実をつけるため子どもたちが成長過程を観察しやすいこと<sup>13)</sup>、収穫後は生のままで食べられることなどの利点があげられる。また、企業が食育活動の一環として苗を配布している<sup>14)</sup>こともトマトを栽培している幼稚園が多い理由であろう。自由記述においても、実のなる野菜の利点として成長をリアルタイムで観察できることや目で見て楽しめることがあげられている。このほか、枝豆、ラディッシュ、ジャガイモ、大根、ニンジン、ブロッコリー、キュウリ、かぼちゃ、とうもろこしの他、ヤーコンや落花生など、近年北海道でも育てられるようになった野菜<sup>15)</sup>を取り入れている幼稚園もみられ、野菜栽培に詳しい人材の有無といったことも栽培物の選択と関連していると推察された。

野菜栽培担当者は担任教諭が約8割と最も多かった。野菜栽培がクラス単位で行われていることがその理由として考えられた。このほか、担任以外の教諭やバスの運転手、外部講師など複数名が野菜栽培に関わっている幼稚園も見られ、菜園の場所や面積、栽培物の種類といったこととも関連していると考えられた。

次に園児の活動内容について考察する。本調査対象の9割以上の幼稚園で園児が種まきや苗植え、収穫を行い、8割以上の幼稚園で園児が水やりを行っていた。また、土づくりや後片付け、草むしりといった作業に園児が関わっている幼稚園は約3割であった。幼稚園教育要領<sup>3)</sup>では、幼児の豊かな感情や好奇心、思考力は、自然の美しさや不思議さなどに直接触れる体験を通して培われることを踏まえ、自然との関わりを深められるように工夫することとしている。通常の暮らしの中では食材がどこでどのように育てられているのかが見えにくい仕組みとなっているが、種まきから収穫まで様々な過程を体験し、食べ物には命があることを知ることは、食に対する認識の基礎になる<sup>13)</sup>とされる。自由記述において、野菜の成長過程を見て本物を知ること、天候等によりうまくいかない場合でもそこから学び取ることがあること、兄弟のように大切に世話をした野菜を収穫することによって命の大切さを実感していたことなどがあげられている。これらのことから、幼稚園における野菜栽培は、園児が自然と関わりをもちながら感性や思考力を育てたり、命の大切さを知った機会として有効であると考えられた。

収穫物の利用方法のうち、おやつと回答した幼稚園が43園(58.1%)と最も多かった。収穫した野菜をおやつとして食べることは、新鮮なうちに味わうことができる利用方法といえよう。次に回答割合が高かったのは持ち帰りの34園(45.9%)であり、比較的手間をかけない方法がとられていることがわかった。

保護者への野菜栽培活動状況の報告方法は、園

やクラス便りが最も多く、クラス単位や幼稚園単位で野菜栽培に取り組んでいる様子が見られた。その他、ブログやHPに掲載し、広く野菜栽培活動の様子を伝えている幼稚園も見られた。

保護者の野菜栽培活動への参加は、種まきや収穫、収穫祭などの行事がそれぞれ2割弱であった。一方、特に関わっていないとする幼稚園は約7割であり、園児のみの活動として行われている幼稚園の方が多かった。

## 2. 野菜栽培活動前後の園児の食べ物に対する態度や行動の変化および活動内容との関連

野菜栽培活動前後の園児の変化について90%以上の幼稚園が「育てた野菜を好きな子どもが増えた」と回答した。本調査では、子どもの嫌いな野菜として上位にあげられるトマト・ナス・ピーマン<sup>16)</sup>を中心に栽培の有無を尋ねていることから、これらの野菜に対する嗜好についても好転していることが予想される。また、自由記述において、自分達の手で野菜を栽培することによって食べ物の大切さを知り、好き嫌いをする子どもが少なくなったことや、人参嫌いの園児が収穫した人参のジャムサンドを食べられたことなどがあげられている。これらのことから、幼稚園における野菜栽培は園児の野菜に対する嗜好を高める可能性が示されたといえよう。

また、「食べ物に興味・関心を示す子どもが増えた」と回答した幼稚園は87.8%であった。教育ファーム<sup>11)</sup>に参加した幼児においても同様の変化が報告されており、本研究と一致する。自由記述においても園児が野菜栽培活動を通して様々な経験をしながら食べ物や野菜への興味や関心を高めるといった内容が多数みられたことから、幼稚園における野菜栽培活動は園児に食べ物に対する興味・関心を持たせる上で有効な活動であると考えられた。

次に、園児の食べ物に対する態度や行動の変化と活動内容との関連について考えてみる。まず、



活動頻度が「週1回以上」の幼稚園は「週1回未満」の幼稚園よりも、「食べ物に興味・関心を示す子どもが増えた」「嫌いなものでも頑張って食べる子どもが増えた」「食べ物を大切にする子どもが増えた」「食べることに積極的な子どもが増えた」「好き嫌いなく食べられる子どもが増えた」「食事の準備や後片付けなどお手伝いに積極的な子どもが増えた」割合が有意に高かった。このことは、野菜栽培活動の頻度が週1回以上の場合は週1回未満の場合よりも園児の野菜や食べ物に対する興味・関心を高めたり、嫌いな食べ物が食べられるようになるといった可能性が高いことを示している。この理由として、活動頻度が高い場合は、先生と野菜について話したり、他の園児が野菜に興味を示す様子を見るチャンスが多いこと、また、園児自身が野菜の成長過程を観察するなかで、不思議さや面白さを感じたり、野菜に対する愛着をもつきっかけが得られやすい状況にあることが考えられる。これらのことから、食育効果を高める上で野菜栽培活動を週1回以上行うことの重要性が示唆された。

また、保護者の参加がある幼稚園はそうでない幼稚園よりも、幼稚園での食事の準備や後片付けなど、手伝いに積極的な子どもが増えた割合が有意に高かった。保護者が野菜栽培活動に参加することは、保護者の食育に対する関心を高め、親子の食べ物に関する会話を増やしたり、園児に食事作りの手伝いをさせるなど、家庭における食に関する働きかけを増やすことにつながると予想される。こうした保護者の働きかけにより園児が変化し、幼稚園での食事の準備や後片付けに対しても積極的な園児が増えたと推察される。幼稚園教育要領<sup>3)</sup>では、家庭と連携し、園児の生活が幼稚園と家庭との間で連続性を保ちつつ展開されるようにすることとしていることから、食育の効果を高める上で保護者が野菜栽培活動に関わるのが重要である可能性が示唆された。

一方、料理教室実施の有無と園児の食べ物に対

する態度や行動の変化との関連は見られなかった。自由記述において、嫌いな野菜であっても仲間と育てて料理した野菜は頑張って食べた園児の様子があげられており、料理教室実施により何らかの食育効果が得られる可能性が予想される。しかしながら、本調査では園児全体の変化について尋ねていることから、一部の学年でのみ料理教室が実施されている幼稚園については、園児全体としての食育効果は低いことが予想される。このことが、本結果に影響した可能性が考えられた。

本研究の限界と課題を述べる。第一に、本調査は北海道の一地方都市にある幼稚園を対象としており、今後、さらに他地域での実証検討を重ねることが必要である。第二に、本調査の有効回答率は50.7%であり、野菜栽培活動に力を入れて取り組んでいる幼稚園や、栄養士の配置や食育年間計画書の作成といった食育活動を積極的に行っている幼稚園からの回答に偏っている可能性が予想される。今後はより客観性の高い調査が必要である。第三に、本調査の回答者は一施設につき一人であり、野菜栽培活動前後の園児の変化については回答者の幼稚園全体に対する印象や主観に基づいた回答がなされている可能性が考えられる。今後は、複数の職員を対象とした調査や調査対象者に園児の保護者を加えて検討するなど、より信頼性の高い調査が必要である。第四に、本調査は野菜栽培を実施している幼稚園のみを対象とした横断調査である。今後は縦断調査を行い、野菜栽培が園児の食に対する態度や行動の変化に及ぼす影響について因果関係を検証する必要があると考える。

## V. まとめ

本研究では、北海道某市内全幼稚園を対象に野菜栽培に関する質問紙調査を行い、幼稚園において一般的に行われている野菜栽培活動の実態を明らかにするとともに、食育効果をもたらす活動方法について検討した。

その結果、2011年度に野菜栽培を行った74幼

幼稚園のうち、「園庭」または「プランター」を用いて園内で野菜栽培活動を行っている幼稚園、およびトマトを栽培した幼稚園は 85%であり、全ての幼稚園で園児が収穫や種まきなど、何らかの野菜栽培活動を行っていた。また、85%以上の幼稚園が、野菜栽培活動により育てた野菜を好きな子どもや食べ物に興味・関心を示す子どもが増えたと回答した。

活動内容と食育効果との関連について、園児の活動頻度が週 1 回以上の幼稚園は、週 1 回未満の幼稚園よりも食べ物に興味・関心を示す子どもや嫌いなものでも頑張って食べる子どもが増えたこと、保護者の野菜栽培活動参加がある幼稚園はない幼稚園よりも食事の準備や後片付けなどに積極的な子どもが増えたことが示された。

これらのことから、幼稚園における野菜栽培活動は園児に対して有効な食育であること、さらに、週 1 回以上の活動および保護者の参加により食育効果が高まる可能性が示唆された。

### 謝辞

本調査にご協力いただきました幼稚園関係者の皆様に深く感謝いたします。また、本学学長である丸山知子先生、森谷梨先生、菅原千鶴子先生をはじめ、諸先生方からのご助言やご支援をいただきました。この場を借りて深くお礼申し上げます。なお、本研究の一部は、2012 年度天使大学特別研究助成（課題名：幼児の野菜嗜好と野菜栽培経験との関連、代表者：木田春代）を受けて行った。

### 引用・参考文献

- 1) 内閣府：食育基本法，2005.
- 2) 文部科学省：教育課程部会におけるこれまでの審議の概要  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/026/siryu/07083001/001.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/026/siryu/07083001/001.htm) .  
(2012. 12. 25 アクセス可能)
- 3) 文部科学省：幼稚園教育要領，2008.

- 4) 厚生労働省：保育所保育指針，2008.
- 5) 文部科学省：幼稚園教育要領解説，2008.
- 6) 古郡曜子・山口宗兼：幼稚園における食育カリキュラム作成に関する基礎的研究—幼稚園教諭へのインタビュー調査を通して—，北海道文教大学研究紀要，36，23-34，2012.
- 7) 菅野靖子・村山伸子：幼稚園の 4 歳児における単独の野菜栽培体験が野菜摂取に及ぼす影響，新潟医福誌，11(2)，64-69，2011.
- 8) 名村靖子・奥田豊子：収穫した野菜のクッキングによる食育効果と保護者の食意識，園児の食関心との関連，大阪教育大学紀要第Ⅱ部門，58(1)，27-42，2009.
- 9) Cason KL: Children are “Growing Healthy” in South Carolina, Journal of Nutrition Education, 31, 235A, 1999.
- 10) Robinson-O’ brien R・Heim S: Impact of garden-based youth nutrition intervention programs: A review, Journal of the American dietetic association, 109, 273-280, 2009.
- 11) 那須正裕・藤本雄二・他：平成 21 年度「教育ファーム推進事業」調査報告書，社団法人農山漁村文化協会「教育ファーム推進事業」事務局，2010.
- 12) 高橋久光：ベランダや屋上でかんたん野菜たのしい野菜づくり育てて食べよう⑩ すぐできるかんたん野菜，24-25，小峰書店，2003.
- 13) 小林茂樹・大木有子・他：食農保育 たべるとがやすそだてるはぐくむ，農文協，2006.
- 14) カゴメ株式会社：～カゴメ食育支援活動～ 小学校・幼稚園・保育園対象 カゴメトマトジュース専用トマト「凜々子(りりこ)」の苗プレゼントのご案内，  
<http://www.kagome.co.jp/company/news/2011/01/000126.html>. (2012. 12. 25 アクセス可能)
- 15) 安達英人：ニューカントリー 2011 年夏季臨時増刊号 北海道の新顔野菜 つくってみヤサイ！，74-77，北海道協同組合通信社，2011.

- 16) カゴメ株式会社:子どもの野菜の好き嫌いに関する調査報告書,  
[http://www.kagome.co.jp/company/news/n\\_pdf/110829.pdf](http://www.kagome.co.jp/company/news/n_pdf/110829.pdf). (2012.12.25 アクセス可能)